

# 蓄藏貨幣の研究 (三)

小林 威雄

まえがき

## 第一章 広義の蓄藏貨幣と狭義の蓄藏貨幣

### 第一節 貨幣の諸機能と蓄藏貨幣

### 第二節 広義の蓄藏貨幣と狭義の蓄藏貨幣

### 第三節 貨幣蓄藏の金の代理者による代理の問題(以上第十五卷第二号所載)

## 第二章 單純な商品生産および流通のもとにおける蓄藏貨幣

### 第一節 購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣

### 第二節 独立的な致富形態としての蓄藏貨幣

### 第三節 「貨幣準備金」としての蓄藏貨幣

### 第四節 世界貨幣の準備金としての蓄藏貨幣(以上前号所載)

## 第三章 資本制生産および流通のもとにおける蓄藏貨幣

### 第一節 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣

### 第二節 「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣(以上本号所載)

## 第四章 信用制度のもとにおける蓄藏貨幣——兌換制下の蓄藏貨幣——

### 第一節 蓄藏貨幣の銀行への集積

### 第二節 銀行の準備金としての蓄藏貨幣

## 蓄藏貨幣の研究 (三)

第三節 兌換制下の蓄藏貨幣

第五章 信用制度のもとにおける蓄藏貨幣——兌換停止下の蓄藏貨幣——

第一節 兌換停止下の貨幣蓄藏

第二節 兌換停止下の蓄藏貨幣

あとがき

第三章 資本制生産および流通のもとにおける蓄藏貨幣

資本制生産は、商品生産および商品流通が存在するだけでは充分でなく、生産の二つの要因である生産手段と労働力が分離する、すなわち、一方には生産手段の所有者が存在し、他方には労働力のみ所有者が存在し、両者がたがいに購買者と販売者として対応する関係、かんたんにいえば資本関係が存在しなければならぬ。資本制生産のもとでは、労働力も特殊な商品として存在し、商品生産が一般的、支配的におこなわれる。

資本制生産のもとにおいては、生産は、人間社会の存続にとって必要不可欠な人間の諸欲望をみたす使用価値を生産するという目的のためにおこなわれぬ、価値を増殖するための一つの手段としておこなわれる。すなわち、資本制生産のもとにおいては、生産は、生産そのものの性格を一変して、資本の価値増殖のための手段にすぎないものとなっている。この資本制生産の性格にもとづいて、ここでの流通もまた、たんなる質料変換として現象しないで、価値増殖との関連においてあらわれる。

したがって、資本制生産とは、価値増殖を推進的動機、規定的目的とする歴史的に規定された社会的生産の一形態であり、流通もまたかかる資本制生産に規定された流通である。

資本とは、価値増殖をおこなう運動体である。この運動の意識的担当者が資本家である。資本家は、価値を追求し、価値増殖を熱望する。致富運動という点においては、独立的な致富形態としての蓄蔵貨幣をたえず形成しようとする。熱望するいわゆる貨幣蓄蔵者と資本家とはことなるところがない。貨幣蓄蔵者の致富欲は、第二章第二節においてのべたように、みずからの労働、節約、禁欲によって、すなわち、より多くの商品を生産し、そして販売し、うけとった貨幣をより少なく消費することによって、貨幣をより多く流通の外部にひきあげ蓄蔵してみたされる。かれは、みずからの労働、節約、禁欲によって富裕となる。ところが、資本家の致富欲は、労働者に労働、節約、禁欲を強要することに<sup>(1)</sup>よって<sup>(1)</sup>みたされる。そしてその強要の程度に応じて富裕となる。かれは貪欲のみをもつにすぎない。貨幣蓄蔵者の<sup>(1)</sup>ばあいの致富運動は、「個人的狂望」として現象するが、資本家の<sup>(1)</sup>ばあいの致富運動は、「社会的機構」の作用として現象する。貨幣蓄蔵者は、いまのべたように、より多く商品を生産し、それを販売し、そして消費を最小限にして貨幣をより多く流通の外部にひきあげ蓄蔵することによって富裕となるの<sup>(1)</sup>にたいし、資本家は、「社会的機構」の一つの動輪として貨幣蓄蔵者のまさに逆の方法によって、すなわち貨幣をたえずくりかえし流通に投じて<sup>(1)</sup>不断の価値増殖を達成することによって富裕となる。したがって、貨幣蓄蔵者のように貨幣を流通の外部にひきあげて蓄蔵することを目的とする、自己目的としての貨幣蓄蔵は、資本家にとってはまったく考えられないことである。価値増殖のためにもちいられない貨幣、資本として機能しないで「遊休」している貨幣は、資本家にとっては死蔵であるにすぎない。資本家は、一時でも貨幣を「遊休」させておかず、これを資本として機能せしめ、価値増殖を達成しようとする。資本家は、貨幣蓄蔵者が禁欲進進に熱中することを「古風な貨幣蓄蔵者の偏見だと嘲笑する」<sup>(2)</sup>。貨幣蓄蔵者は、「<sup>(3)</sup>気のちがった資本家」であり、資本家は、「合理的な貨幣蓄蔵者」であるといわれている。



したがって、資本制生産および流通のもとにおける蓄蔵貨幣の研究は、この生産資本の循環のなかにおいてなされなければならない。すなわち、生産資本の循環のなかにおいて、資本制的生産過程のどのような契機にもとづいて流通の中断が生じ、蓄蔵貨幣が形成されるか、そして、それぞれの形成された蓄蔵貨幣は、どのような目的、役割をもっているか、などについて考察しなければならない。

ところで、資本制生産および流通のもとにおける蓄蔵貨幣ないし貨幣蓄蔵を研究するばあいの一つの重要な典拠としてつぎのような文章がある。

「資本制的生産過程ならびに商業一般——先資本制的生産様式のもとでさえもの——から、つぎのものが生ずる。第一に、蓄蔵貨幣としての貨幣の集積、すなわち、今日では資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分の、支払手段および購買手段の準備金としての集積。これは蓄蔵貨幣の第一形態であって、資本制的生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が発展すれば、少なくとも商業資本のために形成される。いずれも、国内的流通にも国際的流通にも妥当する。この蓄蔵貨幣は、たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる。つぎに、蓄蔵貨幣の第二形態は、貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本の形態であって、新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれにぞくする。この貨幣蓄蔵そのものによって必要となる機能は、さしあたり、その保管、簿記などである」。

この文章によってあきらかなように、資本制生産および流通のもとにおける蓄蔵貨幣には、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣との二つの形態がある。

そこで、資本制生産および流通のもとにおける蓄蔵貨幣をさきの生産資本の循環のなかにおいて、「蓄蔵貨幣の第

一形態」にぞくする蓄藏貨幣と「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣とにわけて考察することにする。

- (1) *Das Kapital*, Bd. I, S. 621, 邦訳『資本論』第一部、九二二―二二ページ。
- (2) a. a. O., Bd. I, S. 623, 邦訳『前掲書』第一部、九二四ページ。
- (3) 「この絶対的な致富運動、この熱情的な価値追求は、資本家と貨幣蓄藏者と共に通なのであるが、しかし、貨幣蓄藏者は氣のちがった資本家にすぎないのに、資本家は合理的な貨幣蓄藏者である。貨幣蓄藏者が、貨幣を流通から救おうとすることによってえようと努力する価値の休まない増加を、より賢明な資本家は、貨幣をたえずくりかえし流通にゆだねることによって達成するのである」(a. a. O., Bd. I, S. 160～1, 邦訳『前掲書』第一部、二九三ページ)。
- (4) 「蓄藏貨幣としての蓄藏貨幣は、ここではたんなる遊休の富となる」(*Kritik*, S. 163, 邦訳『批判』一七五ページ)。
- (5) 「致富の意味をもつところの抽象的形態における貨幣蓄藏は、ブルジョアの生産の發達とともに減少する」(*Kritik*, S. 157, 邦訳『批判』一七〇ページ)。
- 「独立的な致富形態としての貨幣蓄藏は、ブルジョアの社会的進展につれて消失する」(*Das Kapital*, Bd. I, S. 148, 邦訳『資本論』第一部、二七六ページ)。
- (6) 「富としての富の蓄積がおこなわれるのは、實際ただ簡単な流通の領域内だけのことであり、しかも貨幣蓄藏の形態でだけである」(*Kritik*, S. 141, 邦訳『批判』一五一ページ)。
- 「貨幣蓄藏そのものの過程については、これはすべての商品生産に共通であって、これが自己目的としての役割を演ずるのは、未發展な先資本制的商品生産形態のもとにすぎない」(*Das Kapital*, Bd. I, S. 79, 邦訳『資本論』第一部、一一〇ページ)。
- (7) *Das Kapital*, Bd. I, S. 350, 邦訳『資本論』第一部、四五五ページ。
- (8) *Kritik*, S. 143, 邦訳『批判』一五四ページ。
- (9) *Das Kapital*, Bd. III, S. 350, 邦訳『資本論』第三部、四五三ページ。

## 第一節 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣

「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣については、さきの引用文においてつぎの諸点が指摘されている。

(一) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」である。

(二) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「資本制的生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が發展すれば、少なくとも商業資本のために形成される」。

(三) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の形成は、「いずれも、国内的流通にも国際的流通にも妥当する」。

(四) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる」。

これらの諸点のうちもっとも重要なものは(一)である。なぜなら、(一)において、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣についての考察においてもっとも重要な規定であるところの、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣とは、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」である、という規定があたえられているからである。けれども、さきの引用文においては、なぜ、資本は、その一部分を支払手段および購買手段の準備金としてつねに貨幣形態において現存していなければならないのか、いいかえれば、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、どうして資本の再生産過程においてつねに必然的に形成さ

れ、現存していなければならないのか、という「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣が形成される必然的な契機についてはのべられていない。

そこで、まず「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の形成される必然的契機について考察し、そして(一)の内容についてのべ、そのちに、(二)、(三)、(四)の諸点について考察することにする。

まえにのべたように、資本の推進的動機、規定的目的は価値増殖である。価値増殖が連続的、恒常的におこなわれることによって、はじめて資本はつねに資本であることができる。この価値増殖がおこなわれる過程は、生産過程においてである。したがって、価値増殖を連続的、恒常的におこなうためには、資本がつねに資本であるがためには、生産過程が連続的におこなわれなければならない。

ところで、資本の再生産過程は、生産過程と流通過程とを交互にくぐりぬけていく過程であり、したがって、それは生産過程と流通過程との統一としてあらわれる。資本は、その再生産過程において、貨幣資本、生産資本、商品資本という三つの形態をつぎつぎにとつてはぬぎすてる。貨幣資本とは、生産手段と労働力との購入にあてられるべく貨幣の形態をとつて存在する資本である。生産資本とは、生産過程において資本として価値増殖機能をはたしている生産手段と労働力との形態で存在する資本であり、それは、貨幣資本の転形したものにほかならない。商品資本とは、商品の形態をとつて市場に存在する資本のことであつて、それは、生産資本の機能の結果としてつくりだされ、市場においてふたたび貨幣資本に転形されることを待ちうけている資本である。商品資本の形態から貨幣資本の形態へ、貨幣資本の形態から生産資本の形態への転形の過程が、資本の流通過程である。資本の再生産過程は、生産過程と流通過程とを交互にくぐりぬけていく過程であるから、資本の直接的な生産過程は、資本の再生産過程の一つの環をなす



にすぎない。したがって、生産過程がたえず反復され、連続的におこなわれうるためには、流通過程における商品資本の貨幣資本への転形、貨幣資本の生産資本への再転形がたえず円滑にすすんでいることが前提条件となっている。ところで、流通過程における資本の転形は、のちのべるように、たえず時期をことにして継起的におこなわれる。したがって、資本の一部分はたえず更新されながら、流通過程において、商品資本、貨幣資本の形態をとっていないければならない。もし、商品資本の貨幣資本への転形 ( $W' \mid G'$ ) が停滞すれば、すなわち商品が販売されえなかったならば、循環は中断され、 $G \mid W \wedge A$  による生産手段および労働力の填補がおこなわれず、こうして生産は制限され、全過程が停止される。また、 $W' \mid G'$  がおこなわれても、 $G \mid W \wedge A$  が市場における外的事情によって停止せざるをえないとすれば、すなわち、商品資本が貨幣資本に転形されても、貨幣資本の生産資本への再転形がおこなわれえないとすれば、これにつづく生産過程をおこなうことができない。さらにまた、生産過程が休止すれば、販売されるべき商品が存在しなくなるであろう。このように、資本の再生産過程が連続的、恒常的におこなわれるためには、 $W' \mid G'$ 、 $G \mid W \wedge A$ 、および  $P$  のそれぞれの段階が円滑に継起しておこなわれ、資本は、貨幣資本、生産資本、商品資本に分割され、それぞれが同時にたえず更新されながら、空間的に配列され、したがって、それぞれの資本の循環、つまり貨幣資本の循環 ( $G \cdots G'$ )、生産資本の循環 ( $P \cdots P$ )、商品資本の循環 ( $W' \cdots W'$ ) が同一の資本の内部において統一されていなければならない。したがって、資本は、全体としてはたえず更新されながら、これらの三つの形態 (貨幣資本、生産資本、商品資本の三つの形態) においてたえず存在していなければならない。

貨幣資本は、資本の再生産過程においては  $W \mid G \mid W \wedge A$  という過程においてあらわれ、商品資本から生産資本への再転形を媒介する資本の定在である。貨幣資本は、生産資本に再転形すべき資本価値であり、いまだ生産資本へ

の再転形をおこなっていない貨幣状態にとどまっている資本価値である。貨幣資本は、 $W' - G'$ の結果として形成される。ところが、 $W' - G'$ は、一定の時間を必要とし、また偶然に依存しているから「命がけの飛躍」であり、時期をこなししてたえず継起的におこなわれる。したがって、 $W' - G'$ の結果として形成される生産資本に再転形すべき貨幣資本は、たえず継起的に形成されてくることになる。G'には剰余価値部分であるgがふくまれているが、この部分は、資本家の個人的消費にあてられるか( $g - w$ )、あるいは蓄積されるか、いずれにしても資本の再生産過程から排除され、分離される。したがって、生産資本に再転形されるべき貨幣資本は、G'からgをさしひいたGである。

貨幣資本の生産資本への再転形、すなわち  $G - W \wedge A$   $P_m$  は、貨幣資本が  $W' - G'$ の結果としてたえず継起的に形成される、つまり商品資本の貨幣資本への転形がたえず継起的におこなわれるのと同様に、再生産過程そのものの諸条件によって規定されてたえず時期をこなしして継起的におこなわれる。それはつぎのような事情にもとづいている。生産過程を連続的におこなうためには、つねに生産手段 ( $P_m$ ) の生産的な在荷を充分に準備していなければならないが、この在荷に潜在的生産資本は、労働過程において使用される生産手段のそれぞれの諸要素によってあいことなる一定の更新期間をもっている。したがって、生産手段のそれぞれの諸要素は、あいことなる一定の更新期日に購買され、補充される。つまり、 $G - W (P_m)$  は、必然的にあいことなる時期におこなわれる諸購買に分裂する。(生産手段のうちの労働手段が、ある一定の期間のあいだたえず反復される労働過程においてたえず機能をするばあいには、その更新期日は、それが機能しえなくなる一定期間のちである。このばあいには、労働手段の価値の一部分のみがその漸次的消耗にともなうて生産物に移行され、そして、その生産物の流通によって貨幣に転形され、貨幣に転形されたこの価値部分は、貨幣の形態で積立てられる。したがって、労働手段が何年にもわたって労働過程において機能す

るばあいには、生産資本に再転形すべき貨幣資本が転形する生産資本は、主として原料などの労働対象である。労働手段の価値の一部分が貨幣に転形され、そして貨幣形態で積立てられているものは、固定資本の減価償却基金であるが、これは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の具体的な「資本形態」の一つであって、それは資本の再生産過程から分離されており、再生産過程のなかにあつて機能している貨幣資本である「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とはことなる。固定資本の減価償却基金については、つぎの第二節においてのべる。また労働力(A)の購買についてみれば、労働力という特殊な商品は、その性質上在荷されることはありえないし、しかも労働者には特定の短期間ごとに賃銀を支払わなければならない。G—W(A)は、一定の支払期日ごとにおこなわれる。以上のような諸事情は、価値増殖過程である生産過程をたえず連続的にこなうための、資本がつねに資本であるがための「必要」から生ずる。したがって、貨幣資本の生産資本への再転形は、資本の再生産過程そのものの諸条件にもとづいて時期をことにして継起的におこなわれる。こうして、資本の一部分は、たえず更新されながら、つまりそれを構成する個々の貨幣片をたえずかえながら、資本の再生産過程の一段階においてつねに貨幣資本の形態において現存する。つねに、たえず更新されながら、生産資本の形態、商品資本の形態において現存する各資本部分とあいならんで、資本の一部分が、たえず更新されながら、貨幣資本の形態において現存することが、資本のたえまざる循環運動をおこなうための、生産過程を連続的、恒常的にこなうための、資本がつねに資本であるがための不可欠の前提条件となっているのである。したがって、資本は、つねにその一部分を貨幣資本の形態において現存していなければならない。さて、資本のうちつねに貨幣形態において現存している貨幣資本は、生産資本への再転形をおこなうべき資本価値ではあるが、また生産資本への再転形をおこなっていない、その準備の段階にある。ところで、貨幣資本は、貨幣の

諸機能をはたしうるだけであって、他のなんらの機能をもはたすことはできない。それは、貨幣であって、たんなる商品でもなく、また生産をおこなうための諸要素でもない。貨幣が貨幣資本となるのは、それが資本の循環の関連によって規定されている諸段階の一つの状態にあるばあいである。したがって、貨幣資本の諸機能は、貨幣資本が資本であるということから生ずるのではなく、それが貨幣であるということから生ずるのである。貨幣の諸機能は、資本の循環における他の諸段階との関連によってのみ同時に資本機能であるのである。「貨幣資本としては、資本は、諸々の貨幣機能を、当面のばあいでは一般的購買手段の機能および一般的支払手段の機能を、はたしうる状態にある。

……中略……こうした能力は、貨幣資本が資本であるということから生ずるのではなく、それが貨幣であるということから生ずる。他面、貨幣状態にある資本価値は、貨幣機能をはたしうるだけで他の機能はなにもはたしえない。貨幣機能を資本機能たらしめるものは、資本の運動における貨幣機能の一定の役割であり、したがってまた、貨幣機能があらわれる段階と資本の循環における他の諸段階との関連である」<sup>(10)</sup>。

貨幣資本の生産資本への再転形は、 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$  という行為によっておこなわれる。この再転形は、まえにのべたように、資本の再生産過程そのものの諸条件にもとづいて時期をことにして継起的におこなわれる。 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$  という行為がおこなわれるばあいには、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段という貨幣の機能をおこなう。貨幣資本が購買手段として機能するか、支払手段として機能するかということは、 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$  がどのような形態でおこなわれるかということに依存している。そして貨幣資本は、生産資本に再転形され、貨幣資本の形態をぬぎすてゐる。 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$  という行為をおこなっていない貨幣状態にとどまっている貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段としての機能をおこなないという状態にはあるが、現実には購買手段あるいは支払手段として能動的に機能していない。したがって、それは

購買手段あるいは支払手段として機能することを準備している段階にある。つまり、それは購買手段および支払手段の準備金として存在している。それが購買手段の準備金として存在するか、あるいは支払手段の準備金として存在するかは、 $G - W \wedge P_m A$ がどのような形態でおこなわれるか、あるいはおこなわれたかに依存しており、それぞれの準備金が形成される契機はあいことなっている。しかし、いずれにせよ  $W' - G$  の結果として形成され、生産資本への再転形が継起的に時期をことにおこなわれるために、流通を一時中断して貨幣状態にとどまっている貨幣資本は、購買手段および支払手段の準備金として存在しているわけである。「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならぬ部分」が、購買手段および支払手段の準備金として存在する、というのは以上のような意味である。ところで、購買手段および支払手段の準備金として休息状態にある貨幣は、流通していない、非流通手段としての貨幣である。第一章第二節においてのべた規定にもとづけば、それは広義の蓄蔵貨幣の形態にある。したがって、ここでは、この広い意味における貨幣の蓄蔵貨幣形態が貨幣資本の機能となっている。貨幣資本は、さきのべたように、貨幣の諸機能をはたすことができるだけであって、他のなんらの機能をもはたすことはできない。 $G - W \wedge P_m A$  という行為においては、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段という貨幣の機能を能動的にはたす。このことと同様に、ここでは流通していない、非流通手段としての貨幣である広義の蓄蔵貨幣形態が貨幣資本の機能となる。

ここで、貨幣の広い意味における蓄蔵貨幣形態が、貨幣資本の機能となっている、というばあいの広義の蓄蔵貨幣形態については、つぎのことを注意しておかなければならない。 $G - W \wedge P_m A$  という行為をおこなっていない貨幣資本は、貨幣状態にとどまっているが、それは資本の再生産過程そのものの諸条件にもとづいて時期をことにして継的に生産資本に再転形されるべく規定されている。したがって、それは購買手段あるいは支払手段として機能すること

が規定されており、そのための準備として、すなわち購買手段および支払手段の準備金として存在している。貨幣状態にとどまり、購買手段および支払手段の準備金として存在している貨幣資本は、貨幣としては流通していない、非流通手段としての貨幣であるから、広義の蓄藏貨幣の形態にあり、この広義の蓄藏貨幣の形態が、ここでは貨幣資本の機能となっているわけである。ところで、購買手段および支払手段の準備金としての貨幣が、蓄藏貨幣の形態にあるというばあい、蓄藏貨幣は、第二章第一節においてのべたように、広い意味においてのみ、すなわち流通していない、非流通手段としての貨幣であるというかぎりにおいてのみ蓄藏貨幣であるというのであって、狭義の、本来の蓄藏貨幣ではない。すなわち、購買手段の準備金として存在する貨幣は、それが流通していない、非流通手段としての貨幣であるというかぎりにおいてのみ、つまり広い意味においてのみ蓄藏貨幣であるのであって、貨幣の形態規定としては流通手段という形態規定のもとにおかれており、流通手段として機能する貨幣の一部分であり、「貨幣としての貨幣」の機能である貨幣蓄藏にもとづいて形成される蓄藏貨幣、いいかえれば独自の形態規定のもとにある狭義の、本来の蓄藏貨幣ではなく、また支払手段の準備金として存在する貨幣も、それが流通していない、非流通手段としての貨幣であるというかぎりにおいてのみ蓄藏貨幣であるのであって、貨幣の形態規定としては支払手段という形態規定のもとにおかれており、支払手段として機能する貨幣の一部分であり、独自の形態規定のもとにある狭義の、本来の蓄藏貨幣ではない。したがって、購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本は、貨幣としては、流通していない、非流通手段として存在しているから、広い意味において蓄藏貨幣の形態にあるというのであって、けっしてそれが独自の形態規定としての狭義の、本来の蓄藏貨幣形態にあるというのではない。それは、貨幣の形態規定の面からみれば、流通手段あるいは支払手段という形態規定のもとにあるのであって、流通手段としての

貨幣あるいは支払手段としての貨幣の一部分である。購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本は、広義の蓄蔵貨幣形態にあり、ここではこの広義の蓄蔵貨幣の形態が貨幣資本の機能となっていることは、それが独自の形態規定としての狭義の、本来の蓄蔵貨幣形態にあり、独自の形態規定としての狭義の、本来の蓄蔵貨幣形態が貨幣資本の機能となっているという意味ではけつしてない。貨幣の形態規定としては、それは、流通手段あるいは支払手段という形態規定のもとにあるが、しかしそれは能動的に流通していない、非流通手段として存在しているから、この休息状態においては広義の蓄蔵貨幣の形態にある、そこでこの広義の蓄蔵貨幣形態が、ここでは貨幣資本の機能となっているのである。つまり、広義においてのみ蓄蔵貨幣である購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣が、ここでは生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているというわけである。<sup>(11)</sup>

以上の考察によって、なぜ、資本は、つねにその一部分を購買手段および支払手段の準備金として貨幣資本の形態において現存していなければならないか、ということがあきらまかになつたであろう。そして、この資本のうちつねに購買手段および支払手段の準備金として現存していなければならない貨幣資本が、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。いいかえれば、資本の再生産過程において生産資本に再転形すべく貨幣形態において現存している、貨幣資本として機能している貨幣が、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。したがって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における  $G \rightarrow W \wedge A$  が時期をこにして継起的におこなわれる諸購買に分裂されるために必然的に形成され、そして、つねに現存していなければならない。したがつてまた、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵は、資本の再生産過程において必然的につねにおこなわれなければならない。

(10) *Das Kapital*, Bd. I, S. 26, 邦訳『資本論』第二部、四一ページ。

(11) 拙稿『蓄藏貨幣の第一形態』について(『立教経済学研究所』第十三巻第四号、所収)においては、わたくしは「 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$ 」という行為においては、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段という貨幣の機能をはたす。このことと同様に、ここでは、貨幣資本は蓄藏貨幣という貨幣の機能をはたすのである(六五、七九ページ)というように、「貨幣資本は、ここでは蓄藏貨幣という貨幣の機能をはたす」とのべた。これは、『資本論』第二巻の原典七三ページ(邦訳一〇二ページ)にある「したがって、ここでは、貨幣の蓄藏貨幣形態が貨幣資本の機能となるのであって、それはあたかも、 $G \rightarrow W$ では購買手段または支払手段としての貨幣の機能が貨幣資本の機能となるのとまったく同様であり、……」という叙述によったわけであるが、『資本論』では「ここでは、貨幣の蓄藏貨幣形態が貨幣資本の機能となる」となっており、「ここでは貨幣資本は蓄藏貨幣という貨幣の機能をはたす」というようにのはべられていない。問題は、『資本論』の叙述における「貨幣の蓄藏貨幣形態」をどのように理解するかという点にある。旧稿では、わたくしは、これを表面的、皮相的に理解したわけであるが、これは正しい理解ではない。なぜなら、本文においてのべたように、 $G \rightarrow W \wedge P_{mA}$ という行為をおこなうべく、つまり生産資本に再転形すべく規定されている貨幣状態にとどまっている貨幣資本は、購買手段および支払手段の準備金として存在している貨幣資本であり、それは貨幣の形態規定としては、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の一部分であって、独自の形態規定としての狭義の、本来の蓄藏貨幣形態にあるのではなく、貨幣状態にとどまり、流通していない、非流通手段であるかぎりにおいてのみ、つまり広義においてのみ蓄藏貨幣形態にあるのであるからである。したがって、「ここでは貨幣資本は蓄藏貨幣という貨幣の機能をはたす」というようにはいえない。『資本論』における「貨幣の蓄藏貨幣形態」というのは、このばあいは広い意味における貨幣の蓄藏貨幣形態であると理解しなければならぬ。したがって、広い意味においてのみ蓄藏貨幣である購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣が、ここでは生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているのであって、独自の形態規定としての狭義の、本来の蓄藏貨幣が生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているということではけつてない。ここで、旧稿の叙述を訂正しておく。

以上で、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の再生産過程において必然的に形成されなければならない。それは、資本の再生産過程のなかにふくまれていて購買手段および支払手段の準備金として資本の循環の他の諸段階との関連によって生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能している、ということがあきらかになったので、



つぎに、『資本論』の第三巻における「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についての叙述において指摘されている、まえにあげた(二)、(三)、(四)の諸点について考察することにする。

まず(二)は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「資本制生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が発展すれば、少なくとも商業資本のために形成される」ということである。この(二)においては、(イ)「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、単純な商品流通のもとにおけるある形態の蓄蔵貨幣の資本制生産および流通のもとにおける「再現」であるということ、(ロ)「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「総じて商業資本が発展すれば、少なくとも商業資本のために形成される」ということの二つの事柄がのべられている。

(イ)「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、いままでのべてきたところから、資本の再生産過程のなかにおいて生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているわけであるが、この貨幣資本は、貨幣形態において購買手段および支払手段の準備金として存在している。ところで、第二章第一節においてのべたように、購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、単純な商品流通の領域内においても形成される。したがって、この単純な商品流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、資本制生産および流通のもとにおいては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣としてふたたびあらわれる、いかえれば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本制生産および流通のもとにおいて購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣がとる姿であり、資本制生産および流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣の「再現」であるといえることができる。しかし、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本制生産および流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣の「再現」であるとしても、両者を無条件的に同一視

してはならない。単純な商品生産および流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣は、たんなる貨幣として存在しているが、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、たんなる貨幣としてではなく、貨幣資本として資本の再生産過程のなかに存在し、資本規定をうけている貨幣資本である。したがって、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の再生産過程にあって生産資本に再転形すべき貨幣資本として存在し、貨幣資本としての機能しているのであるから、それは単純な商品生産および流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣のたんなる、「再現」ではないといわなければならぬ。<sup>(12)</sup>「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「準備貨幣資本」<sup>(13)</sup>である。

(ロ) 蓄藏貨幣は、広く一般的にいえば、なんらかの契機にもとづいて流通がW—Gにおいて中断せしめられ、貨幣を流通からひきあげる貨幣蓄藏(広義)の結果形成される。「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣もまた、資本の流通過程におけるG—W∧PmAが資本の再生産過程そのものの諸条件に規定されて時期をことにして継起的におこなわれるので、W—Gの結果のGの一部分が一時的に流通を中断せしめられて形成される。「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の流通過程において形成され、資本の流通過程は、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の形成の契機、その目的、役割と密接にむすびついている。ところで、資本の流通過程を担当する資本が商業資本であるから、商業資本にとっては、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の形成は、より密接な関係を直接もった事柄である。したがって、「総じて商業資本が発展すれば、少なくとも商業資本のために形成される」とのべられているのである。

つぎに、(三)は、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の形成は、「いずれも、国内的流通にも国際的流通にも

妥当する」ということである。商品資本の貨幣資本への転形、貨幣資本の生産資本への再転形という、すなわち  $W \rightarrow G$   $\leftarrow P_m A$  という資本の流通過程は、国内的流通におこなわれるばあい、国際的流通におこなわれるばあい、あるいは国内的流通および国際的流通のいずれの流通においても、ともにおこなわれるばあいがある。すなわち、 $W'$  の販売は、国内市場においておこなわれるばあいがあり、また国際的な世界市場においておこなわれるばあいもあり、さらに国内市場、世界市場の両市場において、ともにおこなわれるばあいがあり、生産諸要素の購買も、国内市場でおこなわれるばあい、世界市場においておこなわれるばあい、あるいは国内市場、世界市場の両市場において、ともにおこなわれるばあいがある。したがって、生産資本に再転形すべく貨幣状態にとどまって貨幣資本として機能している「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、国内的流通において形成されるばあいもあり、国際的流通において形成されるばあいもあり、またそれは国内的流通にはいるばあいもあるし、国際的流通にはいるばあいもある。かくして、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の形成は、「国内的流通にも国際的流通にも妥当する」。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の形成は、このように国内的流通にも国際的流通にも妥当するが、しかし形成された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣については、国内的流通と国際的流通との相異にもついで種々の相異点があるので、国内的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とは区別して考えることが必要である。このことについては、つぎの「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と流通との関係についての考察のなかにおいてとりあつかうことにする。

さいごに、(四) は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に

流れこみ、たえず流通から帰ってくる」ということである。この指摘は、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、流通にたいしてどのような関係にあるかということについての指摘である。そこで、まず「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と流通との関係について考察し、つぎに、貨幣の面からみて、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、広い意味においてのみ蓄蔵貨幣であるのか、あるいは狭義の蓄蔵貨幣と規定しうるかどうかということについて考察することにする。

「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、購買手段および支払手段の準備金として貨幣状態にとどまり生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能している。それは、まえにのべたように、資本の再生産過程そのものの諸条件によって規定された一定の時期に、たえず継起的にあいっいで購買手段あるいは支払手段として  $G \rightarrow W \wedge P_m A$  をおこない流通にはいるが、他方、それは、 $W \rightarrow G'$  の結果としてたえず継的にあいっいで形成される。したがって、生産資本に再転形すべく規定されて貨幣状態にとどまって貨幣資本として機能している「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、それを構成する個々の貨幣片をたえず更新しながら、資本の再生産過程のなかにおいてつねに存在する。つまり、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰って」きて、それを構成する貨幣片をたえず更新しながら、つねに資本の再生産過程のなかにおいて存在しているのである。このように、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、たえず流動して、流通に流れこみ、流通から帰ってきて、流通によって規定されており、流通のために資本の再生産過程のなかにおいてつねに存在しているのであるから、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵は、「流通によって、かつ流通のために規定された」<sup>(14)</sup>貨幣蓄蔵であり、「流通のためおよび流通によって条件づけられた貨幣蓄蔵」<sup>(15)</sup>であるという

ことができる。

ところで、単純な商品生産および流通のもとにおける「流通によって、かつ流通のために規定された」貨幣蓄蔵、「流通のためおよび流通によって条件づけられた貨幣蓄蔵」は、第二章第一節においてのべたところの購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵である。「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵と、たんなる購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣とは、まえにのべた「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と、たんなる購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣とを無条件的に同一視してはならないということと同様に、無条件的に同一視することはあやまりであるが、しかし兩者を貨幣としての面より考察すれば、いずれも購買手段および支払手段の準備金として休息状態におかれている蓄蔵貨幣を形成するという貨幣蓄蔵であり、したがって、いずれも流通にたいする関係においてはおなじであるということができる。

たんなる購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、第二章第一節において考察したが、そこでつぎのようにのべた。

購買手段の準備金としての蓄蔵貨幣と支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣とは、「つぎの点においてあいことなっている。すなわち、それぞれの形成される契機、その目的をことにしており、また購買手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、流通手段としての貨幣の一部分であり、それは流通手段として機能する貨幣がとる一時的な状態であるが、支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、支払手段としての貨幣の一部分であり、それは支払手段として機能する貨幣がとる一状態であるという点においてもあいことなっている。しかし、購買手段の準備金としての蓄蔵貨幣と支払手段

の準備金としての蓄蔵貨幣とは、つぎのような共通点をもっている。すなわち、両者は、いずれも流通のために形成され、そして流通によって規定されている、流通過程そのものから生じ、かつ本来ただ流通の休息点にすぎない、一時的に流通していない、非流通手段としての貨幣であり、そして両者とも流通貨幣量(流通手段の流通貨幣量、プラス支払手段の流通貨幣量)の一構成部分をなしており、流通の外部にでておらず、流通貨幣量から分離されていない。購買手段の準備金としての蓄蔵貨幣と支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣とは、以上のような、相異点、共通点をもっている。したがって両者を同一視することはできないが、両者がいずれも流通していない、非流通手段としての貨幣であり、しかも流通貨幣量の一構成部分をなしており、それから分離されていないという点において、いずれも広義の蓄蔵貨幣であって、流通の外部にでている、流通貨幣量から分離されている狭義の蓄蔵貨幣ではない<sup>(16)</sup>。

生産資本に再転形すべく規定され、資本の再生産過程のなかにあつて貨幣状態にとどまり貨幣資本として機能している「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、まえにのべたように貨幣の形態規定としては、流通手段あるいは支払手段という形態規定のもとにあり、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の一部分である。ところで、流通貨幣量の法則は、生産過程の資本制的性格によってはけつて変更されない。したがつて、流通貨幣量について第一章第一節の(二)および(三)(b)のところでのべたことは、資本制生産および流通のもとにおいても妥当する。「流通貨幣の分量にかんし商品流通のところ(『資本論』第一部第三章)で定立された一切の法則は、生産過程の資本制的性格によってはけつて変更されない<sup>(17)</sup>。かくして、貨幣の形態規定においては、流通手段あるいは支払手段という形態規定のもとにあり、貨幣としては、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の一部分であつて、流通によって流通のために規定されるところの「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、流通貨幣量の一構成部分

をなしており、流通の外部にでておらず、流通貨幣量から分離されていないことになる。したがって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、広い意味においてのみ蓄蔵貨幣であるのであって、広義の蓄蔵貨幣のとする種々の形態のなかの一形態ではあるが、けっして狭義の、本来の蓄蔵貨幣ではない。

このように、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、広義の蓄蔵貨幣がとる一形態であるにすぎず、それは流通貨幣量の一構成部分をなしているのであるから、流通貨幣量の増減を調節するというような機能をはたすことはできない。

ところで、さきに「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の形成は、「国内的流通にも国際的流通にも妥当する」という(三)の指摘について考察したさい、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の形成は、国内的流通にも国際的流通にも妥当するが、しかし形成された「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣については、国内的流通と国際的流通との相異にもとづいて種々の相異点があるので、国内的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣と国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とは区別して考えることが必要であるとのべた。以下この点についてのべておこう。

国内的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、いままでのべてきたように、貨幣としては流通手段あるいに支払手段としての貨幣の一部分であり、流通貨幣量の一部分を構成してそれから分離されておらず、流通の外部にでていない、したがって、それは広い意味においてのみ蓄蔵貨幣であるにすぎない。ところが、国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣については、国際的流通の独自性にもとづいて、国内的流通にはいるそれとは種々の点においてあいことなっている。まず、「国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞ

くする蓄藏貨幣は、国内的流通においてとるようになった種々の国民的制服をぬぎすてた金の地金形態、つまり金の現身でなければならぬ。なぜなら、國際的流通において貨幣が世界貨幣として機能するばあいの貨幣の姿は、金の現身であるからである。國際的流通にはいる「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、国内的流通のための購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣が、より高次の資本規定をうけて資本制生産および流通のもとにおいて「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣として「再現」するのと同様に、國際的流通のための購買手段および支払手段の準備金、すなわち世界貨幣の準備金としての蓄藏貨幣が、より高次の資本規定をうけて資本制生産および流通のもとにおいて「再現」したものである。世界貨幣の準備金としての蓄藏貨幣は、つねに金の現身において存在しなければならぬから、國際的流通のための「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、つねに金の現身において存在しなければならぬ。

つぎに、國際的流通は、国内的流通のようには現象せず、貨幣は国内的流通におけるように流通手段あるいは支払手段としてはあらわれないで、一般的な購買手段、一般的な支払手段としてあらわれるから、國際的流通に必要な貨幣量という概念は、国内的流通における流通貨幣量のような意味においては存在しない。この國際的流通の独自性にもとづいて、國際的流通においては、国内的流通における流通手段としての機能あるいは支払手段としての機能に吸収されてしまうような購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣は存在しない。國際的流通のための購買手段および支払手段の準備金、つまり世界貨幣の準備金としての蓄藏貨幣は、国内的流通において必要とされる流通貨幣量からはもちろん分離されており、また國際的流通に必要な貨幣量からも分離され、その外部に存在している。資本制生産および流通のもとにおける、より高次の資本規定をうけた世界貨幣の準備金としての蓄藏貨幣の「再現」で



あるところの国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、したがって、貨幣としては、国内の流通において必要とされる流通貨幣量から分離されており、またそれは国際的流通のために必要とされる貨幣量の構成部分ではなく、その外部に存在していることになる。そこで、国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣としては、流通していない、非流通手段としての貨幣である、つまり広義の蓄蔵貨幣であるということはいうまでもないが、さらに流通に必要な貨幣量から分離されており、その外部に存在している貨幣が狭義の蓄蔵貨幣であるから、それは狭義の蓄蔵貨幣の一形態であるといわなければならぬ。

要するに、国内の流通のための購買手段および支払手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存している貨幣が狭義の蓄蔵貨幣であるから、すなわち国内的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣として広義においてのみ蓄蔵貨幣であるにすぎないが、国際的流通のための購買手段および支払手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していない部分」、すなわち国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣として広義の蓄蔵貨幣であるばかりでなく、狭義の蓄蔵貨幣であるのである。さきの「国内の流通にも国際的流通にも妥当する」ということは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を形成するということが、いずれの流通にも妥当するということであって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣の国内的流通にたいする関係、国際的流通にたいする関係が、いずれもおなじであるということはいわねばならない。

国内的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣も、国際的流通にはいる「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣も資本にとっては、いずれも生産資本に再転形すべく機能している貨幣資本である。したがっ

て、いずれも資本の再生産過程のなかにあって貨幣資本として機能しているのであるから、資本の再生産過程の攪乱を解決するというような機能ははたすことはできない。<sup>(18)</sup>

(12) 遠藤茂雄氏は、「貨幣の流通速度について」(『大月短大論集』、創刊号、所収)において、「この資本のうち常に貨幣形態で存在する部分は、単純商品流通の考察のときに『鑄貨準備』あるいは『休職状態の鑄貨』として『単に形式的に規定』(『研究』Ⅱ八一頁(宇野・向坂編『資本論研究』、至誠堂版、三八〇ページ))されたものの具体化された姿に他ならない。つまり『鑄貨準備』として考えられたものは、資本の流通過程の考察においては、『たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならぬ資本部分という形で再び現われて来る。そしてこの場合には、その大きさを規定する一定の法則が同時に明らかに』(『研究』Ⅱ八二頁(同上、三八〇ページ))されうる」(三一—二二ページ、ハ)内は小林)とのべられていたことにたいして、わたくしは、『蓄藏貨幣の第一形態』についてにおいて、(1)「鑄貨準備金」は購買手段の準備金を意味するものではあるが、「鑄貨準備金」は支払手段の準備金をもあらわす概念ではない、(2)「資本のうち常に貨幣形態で存在する部分」とは、購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本であるから、それは「鑄貨準備金」が「具体化された姿」であるばかりでなく、支払手段の準備金が具体化された姿でもなければならぬ、(3)しかし、「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならぬ資本部分」という形で、「鑄貨準備金」および支払手段の準備金がふたたびあらわれるといっても、それは、単純な商品流通のもとにおける、たんなる購買手段および支払手段の準備金ではなく、生産資本に再転形されるべき貨幣資本として存在しており、それは貨幣資本として機能している。したがって、それは単純な商品流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金のたんなる再現ではない、というようにのべた(六九—七〇ページ)。その後、遠藤氏は、「購買および支払手段の準備金について」(『金融経済』、六七号、所収)において、第一点はもちろん第二点については、「資本のうち常に貨幣形態で存在する部分が、鑄貨準備金の具体化された姿であると共に支払手段の準備金の具体化された姿である、ということ、小林氏の指摘の通りである」(二九ページ)とのべられているところから、諒承されておられるが、第三点については、つぎのようにのべられている。

「周知のように、資本は流通上では、商品資本および貨幣資本の姿態をとっている。この商品資本および貨幣資本は、商品流通それ自体にとってはたんに普通の商品であり貨幣である。それが資本の一形態だからといって流通上で普通の商品・普通の貨

幣以上の役割をもつわけではない。したがって、資本の循環中において形成されるところの・購買および支払準備金も、またそれが同時に貨幣資本として機能しているからといって、商品流通それ自体にとつては、したがってその貨幣機能そのものにとつては、単純商品流通において成立するところの・購買手段の準備金および支払手段の準備金と何らかわるところがないのである。つまり、これらの準備金が『同時に資本機能の意義をもつ』(II, 73頁〔*Das Kapital*, Bd. I, S. 73)のは、資本の『循環の他の諸段階との関連によるのみ』(同前) そうなのである。小林氏は、資本流通において成立する購買および支払準備金が同時に資本の貨幣形態であることから、購買および支払準備金としての機能以上のいかなる貨幣機能を認められるのであろうか。氏は、これら準備金が同時に資本の貨幣形態であることを理由として、資本流通における購買および支払準備金は(単純流通における購買および支払準備金に反して)、流通貨幣から分離されたところの貨幣となる、とでも考えておられるのだろうか(二八一―九ページ、「」内は小林)。

わたくしが、「資本のうちに常に貨幣形態で存在する部分」、いかえれば「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、単純な商品流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣のたんなる「再現」ではないということの意味は、それらが形成される基盤である流通が——商品流通そのものとしてではなくることとなるところがないとしても——前者は資本の流通であり、資本制的に規定された流通であるが、後者は単純な商品流通であるので、この二つの流通は概念として区別して考えなければならぬし、したがってまた、前者は資本の再生産過程のなかにおいて生産資本に再転形すべく規定され一貨幣資本として存在しているが、後者はたんなる貨幣として存在しているにすぎない、という点を看過してはならないから、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、たんなる購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣のたんなる「再現」、つまりそれがそのままその通りにあらわれるといふように考えてはならないという意味である。

「商品流通それ自体にとつては」「あるいは貨幣としての面より考察するならば、両者は、遠藤氏がべられているとおり」何らかわるところがない。したがって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣にかんする貨幣としての諸規定は、たんなる購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣についての諸規定がそのまま妥当する。購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣については、第二章第一節において考察したが、それは、貨幣の形態規定としては流通手段あるいは支払手段という形態規定のもとにおかれており、したがって、それは、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の一部分であり、流通貨幣量の一構成部分をなしているのであって、独自の形態規定のもとにおける狭義の、本来の蓄蔵貨幣ではない。それは、能動的に流

通していない、非流通手段として存在している貨幣であるという意味においてのみ、すなわち広い意味においてのみ蓄蔵貨幣であるというのである。資本の流通過程においては、購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣が、資本の流通において、資本規定をうけて「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣としてあらわれ、貨幣資本として機能するわけであるが、ここでは、流通手段あるいは支払手段としての貨幣の一部分であるが、流通していない、非流通手段としての貨幣であるという意味においてのみ、すなわち広義においてのみ蓄蔵貨幣であるところの購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣が、生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能するのであって、独自の形態規定のもとにある狭義の、本来の蓄蔵貨幣が貨幣資本として機能するというのではない。したがって、「資本流通において成立する購買および支払準備金が同時に資本の貨幣形態であることから、購買および支払準備金としての機能以上のかなる貨幣機能」をも認めるわけではない。またさきのべたところから、「資本流通における購買および支払準備金は(単純流通における購買および支払準備金に反して)、流通貨幣から分離されたところの貨幣となる」というようには考えていない。

(13) *Das Kapital*, Bd. I, S. 81, 邦訳『資本論』第二部、一一二ページ。

(14) a. a. O., Bd. I, S. 72, 邦訳『前掲書』第二部、一〇一ページ。

(15) a. a. O., Bd. I, S. 344, 邦訳『前掲書』第二部、四四八ページ。

(16) 拙稿「蓄蔵貨幣の研究(一)」、『立教経済学研究』第十五卷第三号、所収、一九〇ページ。

(17) *Das Kapital*, Bd. I, S. 332, 邦訳『資本論』第二部、四三二ページ、「」内は小林。

(18) 真藤素一氏は、「固定資本はその全価値量が一挙に投下され、その磨損におうじて価値を流通から引上げて蓄蔵される。この蓄蔵貨幣としての減価償却積立金は流通・支払手段準備金である」(『資本と蓄蔵貨幣』、『パンキング』、第一三七号、所収、四五ページ)とのべられて、固定資本の減価償却基金としての蓄蔵貨幣を「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるとされている。「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、本文においてのべたように、資本の再生産過程のなかにふくまれていて購買手段および支払手段の準備金として資本の循環の他の諸段階との関連によって生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているが、固定資本の減価償却基金として存在する貨幣資本は、第二節においてのべるように、不変資本中の固定的諸要素が、その旧来の現物形態のまま生産過程において機能しつづけているあいだは資本の再生産過程から排除され、分離されており、その過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しており、貨幣資本として機能していない。したがって、固定資本の減価償却基金

は、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の「資本形態」の一つであつて、真藤氏が主張されるように、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣ではない。なお、真藤氏は、第二章第一節の註(14)においてのべたように、蓄藏貨幣を広義、狭義に区別することなく、蓄藏貨幣とは、すべて独自の形態規定のもとにおける本来の、厳密な意味における蓄藏貨幣として理解されている。したがつて、「鑄貨準備金」≡購買手段の準備金としての貨幣は蓄藏貨幣ではない、と主張されるのであるが、「資本運動そのものから析出される」購買手段の準備金は、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣であるとされてしまう(四六ページ)。購買手段の準備金としての貨幣は、單純な商品生産および流通のもとにおいては「蓄藏貨幣」ではなかつたが、資本制生産および流通のもとにおいては「蓄藏貨幣」となる!?

## 第二節 「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣

まえに引用した『資本論』第三卷の文章において、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣については、つぎのようにのべられていた。

「つぎに、蓄藏貨幣の第二形態は、貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本の形態であつて、新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれにぞくする」。

この文章を整理すると、(一)「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本の形態」である、(二)「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする、との二つにわけられる。この二点のうち、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の研究においてもっとも重要なものは、いうまでもなく(一)である。そこで、まずこの(一)においてのべられていることを考察し、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、どういふ蓄藏貨幣であるかといふことを把握しよう。

(一) において「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本の形態」であるとのべられているので、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣を理解し、把握するためには、「貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本」とは、どのような資本であるかということを理解しなければならぬ。「貨幣形態で遊休し、目さき失業している資本」とは、いかえれば、「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。ところで、「遊休資本」、「失業資本」とは、一般的にいえば、「機能していない資本」のことであるが、<sup>(19)</sup>「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるというばあいの「遊休資本」、「失業資本」は、資本の再生産過程から排除されており、この過程の外部に存在していて、資本として機能していないという本来の意味において「遊休」している、「失業」している資本のことである。したがって、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であると規定されているばあいの「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」とは、資本の再生産過程において生産過程の連続性を維持するために、他の諸段階との関連によって生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能していない<sup>(20)</sup>、したがって、資本の再生産過程から排除され、分離されており、その外部に存在している本来の意味において「遊休」し、「失業」している貨幣資本のことである。

このように、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在している貨幣資本であるが、それは、資本の再生産過程にたいしてなんらの関係をもたないということの意味するものではない。第一に、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣は、すぐあとでのべるように、資本の再生産過程における諸契機から必然的に、また偶然的に形成されるものであって、それが形成される契

機において資本の再生産過程に密接な関係をもっている。第二に、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における必然的、または偶然的な諸契機にもとづいて形成され、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在しているのであるから、それは、流通からひきあげられて流通の外部にでているが、しかし、一定の大きさにたっしたばあい、あるいは一定の期間が到来したばあい、あるいはまた、資本の再生産過程が外的な諸事情によって攪乱されたばあいには、再生産過程にふたたびはいり、生産資本に転形すべき貨幣資本としての機能をはたし、流通にふたたびはいって購買手段あるいは支払手段として機能する。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程にたいして無関係なものではけっしてない。もし、それが無関係なものであるとすれば、それが「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるというようには規定しえないであろう。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程においてふたたび充用されるべく規定されている貨幣資本であり、充用されるまでのあいだこの過程の外部にあって「遊休」し、「失業」している貨幣資本である。「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「貨幣形態で遊休し、目さき、失業している資本の形態」であるという規定の「目さき」というのはこのような意味である。

(19) 「遊休資本」、「失業資本」とは、一般的にいえば、「機能していない資本」のことであるが、「機能している資本」と「機能していない資本」とをどのように把握するかによって、「遊休資本」、「失業資本」をいろいろな意味に解することができる。このことについては、拙稿『蓄蔵貨幣の第二形態』について(『立教経済学研究』第十四巻第一号、所収)の一三四—一四一ページにおいてのべておいたので参照されたい。

(20) 資本の再生産過程において生産過程の連続性を維持するために他の諸段階との関連によって生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているものは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。

では、このような「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程におけるどのような契機にもとづいて形成されるか、そして、それは具体的にどういう目的、役割をもって存在しているか、ということについてみてみよう。

「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成される「資本形態」は、(一)固定資本の減価償却基金、および(二)「新たに蓄積された未投下貨幣資本」の二つの形態であり、一定の諸条件のもとにおいて偶然的に形成される「資本形態」は、(三)「遊離貨幣資本」という「特殊的形態」である。以下、これらの「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の三つの「資本形態」についてみていこう。

#### (一) 固定資本の減価償却基金

労働用建物や機械、原料、補助材料などの不変資本のうちの機械(および労働用建物)など、要するに労働手段という名称のもとに一括されるものは、ある一定の期間のあいだたえず反復される労働過程においてたえずくりかえしおなじ機能をおこなう。したがって、これらの労働手段は、長かれ短かれ一定の期間、生産面に繫縛されている。しかし、それらは、その機能をおこなうのにもなって漸次消耗し、この漸次的消耗とともにこの不変資本部分の価値の一部分は、その助力によって生産された生産物に移行する。だから、これらの労働手段の価値の一部分は、それらの機能、したがって消耗にもなって移行するが、他の価値部分は、依然として労働手段に固定されている。この固定されている価値部分は、労働手段がやくにたたなくなるまで、したがってまた、労働手段の価値が長かれ短かれ一定の期間のあいだたえず反復される労働過程からつくりだされてくる一定分量の生産物に配分されてしまうまで、たえず減少する。しかし、労働手段としてやくだつかがり、この不変資本の価値の一部分は、依然として労働手段に



固定されている。

かくして、この不変資本部分の流通は独自のものである。その独自性はつぎの点にある。「第一に、この部分は、その使用形態において流通するのではなく、その価値のみが流通するのであり、しかもそれが労働手段から生産物——商品として流通する生産物——に移行するにつれて漸次的・断片的に流通するのである」<sup>(21)</sup>、「第二に、「労働手段の全機能期間にわたり、その価値の一部分は、その助力によって生産される商品に対立して自立的に、つねにその労働手段に固定されている」<sup>(21)</sup>。こうした独自性をもつ不変資本部分は固定資本と名づけられる。「こうした独自性により、この不変資本部分は固定資本という形態をうけとる」<sup>(22)</sup>。このばあいには注意しなければならないことは、「生産手段に投下された資本価値の一部分に固定資本の性格をあたえる規定は、もっぱら、この価値が流通する独自の様式のうちにある。この独自の流通様式は、労働手段がその価値を生産物に交付する——または価値形成者として生産過程のなかでふるまう——独自の様式から生ずる。そして、この後者そのものは、また労働過程における労働手段の機能の特殊的方式から生ずる」<sup>(23)</sup>というのである。

このように、不変資本の一部分に固定資本の性格をあたえる規定は、その価値が流通する独自の様式のうちにあるのであるが、この固定資本の独自の流通様式から、固定資本の独自の回転が生じてくる。

さきにもべたように、労働手段が消耗によってうしなう価値部分は、生産物の価値部分として流通する。そして、この生産物は、その流通によって商品から貨幣に転形する。だから、生産物の価値の一部分として構成されている労働手段の価値部分もまた同時に貨幣に転形する。かくして、労働手段の価値は、いまや二重に存在することになる。すなわち、その一部分は、生産過程にぞくする労働手段の現物形態のなかに固定されたままで存在し、他の部分は、

貨幣の形態で存在する。そして、労働手段の現物形態において存在する価値部分はたえず減少し、貨幣形態に転形された価値部分はたえず増加し、ついに労働手段は、その生涯をおわって、その全価値がその遺骸から離れて貨幣に転形する。ここに、固定資本の回転における独自性があらわれている。固定資本の価値の貨幣への転形は、その価値部分の担い手である商品の貨幣への転形と歩調をおなじくするが、貨幣形態から現物形態への再転形は、労働手段自身の再生産期間によって、すなわち、労働手段が消耗しつくされてしまつて、おなじ種類の新しい労働手段により更新されなければならなくなる時間によって規定されている。ある機械の機能期間が、たとえば十年であるとすれば、この機械に最初に投下された価値の回転期間は十年ということになる。この期間が経過する以前においては、この機械は更新される必要はなく、その現物形態で機能しつづける。そのあいだに機械の価値は、断片的に、それによって生産された諸商品の価値部分として流通し、かくして、漸次、貨幣に転形される。そして、ついに十年目のおわりには機械の価値はすっかり貨幣に転形されて、貨幣から新しい機械に再転形される。つまりその回転が完了する。

このような固定資本の独自の回転から、その再生産をおこなうまでのあいだ固定資本の価値は、漸次的に貨幣形態において積立てられていなければならないということが必然的に生じてくる。この貨幣形態において積立てられつつある固定資本の価値が、固定資本の減価償却基金とよばれているものである。したがって、固定資本の減価償却基金は、固定資本の独自の回転にもとづいて必然的に形成されなければならない。

さて、固定資本の減価償却基金は、このように固定資本の独自の回転にもとづいて形成されなければならないのであるが、その形成は、現物形態での固定資本の助力によって生産された商品が貨幣に転形されると同時に、商品にふくまれている固定資本の磨損価値部分も貨幣に転形され、この固定資本の磨損価値部分である貨幣を流通からひき

あげることによっておこなわれる。いいかえれば、固定資本の減価償却基金は、 $W' - G'$ によって転形された貨幣の一部分を構成する固定資本の磨損価値部分を購買にもちいないで、その流通を中断せしめて積立てることによって形成される。この固定資本の減価償却基金の形成、積立は、多かれ少なかれ一定の年数からなる再生産期間、つまり、不変資本中の固定的要素がその旧来の現物形態のまま生産過程において機能しつづける期間がおわるまでくりかえしつづけておこなわれる。固定資本の再生産期間がおわたときに、その減価償却基金として積立てられていた貨幣は、一挙に流通にはいり新しい労働手段の購入にあてられる。すなわち、貨幣形態から現物形態に再転形される。だが、つぎには、ふたたびこの新しい労働手段のつぎの更新にさいしての準備として減価償却基金の積立がおこなわれなければならない。

したがって、固定資本の減価償却基金は、固定資本の現物形態が更新され、填補されるまでのあいだ貨幣形態で、その更新、填補のための準備として存在する。それは、「不変資本価値の一部分たる固定部分の貨幣形態である」<sup>(24)</sup>。それは、流通を中断された貨幣形態において存在するのであるから、減価償却基金として積立てられている貨幣は、蓄蔵貨幣の形態にある。したがってまた、固定資本の減価償却基金の積立は貨幣蓄蔵である。そして、「この貨幣蓄蔵は、それ自身、資本制的再生産過程の一要素である。すなわち、固定資本がその寿命をおわり、したがって、その全価値を生産された商品に交付してしまつて、いまや現物で填補されなければならないときまでの、固定資本またはその個々の要素の価値の再生産および積立——貨幣形態での——である」<sup>(25)</sup>。

だが、固定資本の減価償却基金としての蓄蔵貨幣は、固定資本を現物形態で更新し、填補するためにもちいらるべく規定されている蓄蔵貨幣であり、したがって貨幣資本であるが、資本の再生産過程のなかにあつて、生産過程を

連続的、恒常的におこなうために機能しつつある貨幣資本ではない。なぜなら、生産過程においては、固定資本の現物形態は、労働手段としてその機能をはたしている、つまり、固定資本の減価償却基金が充用されることなしに、生産過程は連続的におこないうる、したがって価値増殖がたえずおこないうるからである。固定資本の減価償却基金として積立てられている貨幣は、「固定資本の新たな諸要素に再転形されて死滅した諸要素を填補するときのみ、その蓄藏貨幣形態をうしない、かくしてはじめて、流通に媒介される資本の再生産過程へふたたび能動的にはいりこむ」<sup>(26)</sup>。したがって、固定資本の減価償却基金として存在する貨幣資本は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部に存在し、不変資本中の固定的諸要素が、その旧来の現物形態のまま生産過程において機能しつつづけているあいだ「遊休」し、「失業」している貨幣資本であるということができる。「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣とは、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しているところの「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」であるから、固定資本の減価償却基金は、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の一つの「資本形態」であるということができる。

(21) (22) *Das Kapital*, Bd. I, S. 152, 邦訳『資本論』第二部、二〇四ページ。

(23) a. a. O., Bd. I, S. 153~4, 邦訳『前掲書』第二部、二〇五―六ページ。

(24) (25) (26) a. a. O., Bd. I, S. 455, 邦訳『前掲書』第二部、五八九ページ。

(一) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」

『資本論』第三巻における「蓄藏貨幣の第二形態」についての叙述において、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣として明示されている「資本形態」は、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」である。

「新たに蓄積された未投下貨幣資本」というのは、生産の規模を拡大するために、資本の再生産過程において機能すべく規定されている貨幣資本であるが、まだこの過程において貨幣資本として機能していない、つまりこの過程で充用されていない、投下されていない積立てられつつある貨幣化された剰余価値である。したがって、貨幣形態において積立てられている剰余価値についての考察は、同時に「新たに蓄積された未投下貨幣資本」についての考察であるということになる。

資本制生産の全性格は、投下された資本価値の増殖によって、したがって、第一には、できるだけ多くの剰余価値の生産によって規定されている。だが、第二には、資本の生産によって、つまり剰余価値の資本への転化によって規定されている。実現された剰余価値の全部が資本家によって非生産的に、個人的に消費されるならば、再生産は以前とおなじ規模においておこなわれる。すなわち、単純再生産の過程が進行するにすぎない。しかし、このように実現された剰余価値を非生産的に消費するために資本制生産をおこなうということは、資本の自己目的に矛盾している。この矛盾は、実現された剰余価値を既存の資本にくわえて生産の規模を拡大して、その運動をつづける拡大再生産によって解決される。資本制生産にとっては、この拡大再生産こそが本来の発展形態である。単純再生産についての考察は、拡大再生産を科学的に説明するための理論的抽象である。したがって、資本制生産は、たえず拡大再生産の途をすすまなければならない。拡大再生産は、資本制生産にとって一つの法則となっている。

このように、拡大再生産は、資本制生産の本来の発展形態であるが、生産の規模を拡大し、拡大再生産をおこなうためには資本を追加しなければならない。したがって、資本家は、実現された剰余価値の全部を個人的に、非生産的に消費することをやめ、その一部分を「追加資本」としてもちいなければならない。

ところで、実現され貨幣化された剰余価値  $g$  の一部分が、ただちにふたたび既存の資本価値に追加され、かくして既存の資本と一緒に再生産過程にはいりこみうるかどうかということは、 $g$  のたんなる存在とは無関係な事情に依存している。「第一の事業とは別に創業される第二の独立的事業における貨幣資本として  $g$  をやくだけたせよとしても、 $g$  がこれに充用されるのは、 $g$  がこの事業に必要な最小限の大きさを有するばかりであるということとはあきらかである。また  $g$  を最初の事業の拡張に使用しようとしても、 $P$  の質料的諸要因の関係やそれらの価値関係のために、 $g$  はやはり一定の最小限の大きさをもたなければならぬ。この事業で作用するすべての生産手段には、質的な相互関係ばかりでなく、一定の量的な相互関係、比率的な大きさがある。生産資本にはいりこむ諸要因のこのような質料的関係およびそれによって担われる価値関係は、 $g$  が生産資本の増加分としての追加的生産手段および労働力に——または前者のみに——転態されうるものとなるためにもたなければならぬ最小限の大きさを規定する」。

(27)

このように、生産過程を拡大するための諸比率というものは、恣意的に規定されるのではなくして、技術的に指定されている生産手段および労働力の質料的関係およびそれによって担われる価値関係によって規定されている。したがって、実現された剰余価値の一部分は、資本化されるはずではあっても、しばしばいくつもの資本の循環の反復によってはじめて現実に「追加資本」として機能しうる大きさにたつことがある。 $g$  が事業を拡張するために必要とされる最小限の大きさをもたないかぎり、資本の循環によって継起的に生みだされる  $g$  の総額が既存の資本と一緒にたつて機能しうるまで、資本の循環は、いくたびも反復されなければならない。したがって、 $g$  は現実に「追加資本」として機能しうる大きさにたつするまで積立てられていなければならないことになる。ここに、 $g$  が一時的に積立てられなければならないという必然性がある。

この積立は、生産過程において生産された剰余価値をふくむ商品資本 ( $W'$ ) が貨幣資本 ( $G'$ ) に転形され、その剰余価値部分である  $g$  の一部分を流通からひきあげることにしておこなわれる。いかえれば、 $W' \rightarrow G'$  によって実現された剰余価値  $g$  の一部分を購買にもちいないで、流通を中断せしめることによっておこなわれる。したがって、流通からひきあげられている  $g$  は、流通していない、非流通手段としての貨幣であり、蓄蔵貨幣の形態にある。したがってまた、 $g$  の一部分の積立は貨幣蓄蔵である。このばあいの貨幣蓄蔵についてはつぎのようにいわれている。

「かくしてここでは、貨幣蓄蔵は、資本制的蓄積過程にふくまれる・この過程にともなう・だが同時に本質的にはこの過程から区別される・一契機として現象する」<sup>(28)</sup>

「だから、このばあいには、貨幣蓄積、貨幣蓄蔵は、現実の蓄積——産業資本の作用する規模の拡張——に一時的にともなう過程として現象する」<sup>(29)</sup>

「ところでここでは、蓄蔵貨幣が貨幣資本の形態として現象し、貨幣蓄蔵が資本蓄積に一時的にともなう過程として現象する」<sup>(30)</sup>

積立てられている貨幣形態において現存する剰余価値の蓄蔵貨幣形態は、資本の再生産過程にはいつて現実に資本として機能するために、この過程の外部にあって機能的に規定されている準備段階にある一状態であるから、このような蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵は、資本の蓄積過程にふくまれており、この過程に一時的にともなうものとして現象する。だがしかし、同時にこの貨幣蓄蔵のものによっては、資本の再生産過程はなら拡大されえないのであるから、本質的には、それは資本の蓄積過程からは区別されていると考えなければならぬ。 $g$  を積立てるといふ貨幣蓄蔵は、以上のように規定されている貨幣蓄蔵であるのである。

したがって、積立てられている  $g$  は、流通からひきあげられ、流通していない、非流通手段としての貨幣であり、蓄蔵貨幣の形態にあるが、それはたんなる蓄蔵貨幣ではなく、「追加資本」として機能しうる大きさにたっすれば、資本の再生産過程のなかにはいりこみ、現実はこの過程において機能している既存の資本価値と一緒にたつて生産の規模を拡大するために生産資本の諸要素に転形されるべき使命、目的をもっている貨幣資本である。しかしながら、それがこのような目的によって規定されている貨幣資本であるといっても、それはまだ資本の再生産過程にはいりこんでおらず、この過程において貨幣資本としては機能していない、まだ機能をはたす能力をもっていない貨幣資本である。したがって、それは資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって、「追加資本」として機能しうる大きさにたつするまでのあいだ「遊休」している、「失業」している「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。かくして、積立てられている  $g$ 、すなわち「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の一つの「資本形態」であることができる。<sup>(31)</sup>

(27) *Das Kapital*, Bd. II, S. 78~9, 邦訳、『資本論』第二部、一〇九ページ。

(28) a. a. O., Bd. II, S. 74, 邦訳、前掲書、第二部、一〇三ページ。

(29) a. a. O., Bd. II, S. 79, 邦訳、前掲書、第二部、一一〇ページ。

(30) a. a. O., Bd. II, S. 79~80, 邦訳、前掲書、第二部、一一〇ページ。

(31) 『資本論』第二巻における積立てられている  $g$  についての叙述には、それは、「潜勢的貨幣資本」あるいは「潜在的貨幣資本」であるということがたびたびみいだされるのであるが、この「潜勢的貨幣資本」、「潜在的貨幣資本」にかんしては、拙稿『蓄蔵貨幣の第二形態』についての一五三―一六ページを参照されたい。



ここで、「遊離貨幣資本」といふばあいの「遊離」とは、「資本の遊離」といふのは、生産を旧来の規模の限界内で続行するためには、生産物の総価値のうち従来は不変資本または可変資本に再転形されなければならなかった一部分が、いまや自由に処分される余分なものとなるという意味である」といふようにのべられているような意味における「遊離」である。そして、資本の再生産過程にとって過剰となり、余分となってこの過程から「遊離」された貨幣が貨幣資本として現象するのは、「それが原資本価値の成分であり、したがって資本として作用しつづけるべきであつて、たんなる流通手段として支出されるべきではないからである」<sup>(33)</sup>。

「遊離貨幣資本」は、資本の再生産過程における必然的な契機にもとづいて形成されるものではなく、一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に形成される。「遊離貨幣資本」が偶然的に形成される一定の諸条件は、生産の規模を同等不変とすれば、回転期間、生産諸要素（生産手段および労働力）の価格、生産物  $W'$  の価格のあいだでの種々の變動によってあたえられるのであるが、このことについては、すでに拙稿「蓄蔵貨幣の第二形態」について<sup>(34)</sup> においてのべたのでここでは省略することにす。

資本の再生産過程から「遊離」された貨幣資本、すなわち「遊離貨幣資本」は、資本の再生産過程にとって過剰となり、余分となった貨幣資本であるから、それはこの過程の外部に存在し、資本として機能しつづけるべきであるが、一時的に「遊休」し、「失業」している。したがって、「遊離貨幣資本」は、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しているところの「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。すなわち、それは「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「資本形態」の一つである。しかしながら、この「遊離貨幣資本」は、一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に形成される

ものであるから、それは、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「特殊的形態」であると考へなければならぬ。

以上、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、資本の再生産過程におけるどのような契機にもとづいて形成されるか、そして、それは具体的にどういう目的、役割をもって存在しているかということについて考察し、資本の再生産過程における必然的契機にもとづいて形成されるものとして固定資本の減価償却基金と「新たに蓄積された未投下貨幣資本」との二つの「資本形態」をあげ、さらに一定の諸条件のもとにおいてのみ偶然的に形成される「特殊的形態」として「遊離貨幣資本」をあげて、それぞれの形成される契機、目的、役割などについてあきらかにしてきた。<sup>35)</sup>

そこで、つぎに、これらの「資本形態」において存在する「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣の面からみて狭義の蓄蔵貨幣として規定することができるかどうかということについて考察しよう。

すでに、あきらかなように、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における必然的、または偶然的な諸契機にもとづいて形成され、資本の再生産過程から排除され、分離されており、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」している「遊休貨幣資本」であり、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」である。ところで、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程から排除され、分離され、この過程の外部にあって「遊休」し、「失業」しているということは、貨幣としての面よりみれば、それが流通していない、非流通手段としての貨幣である、すなわち、広義の蓄蔵貨幣の形態にあるということをいひあらわしているばかりでなく、それが、流通の外部に存在し、流通貨幣量から分離されている非流通手段としての貨幣である、すなわち、狭義の蓄

蔵貨幣であるということをいいあらわしている。なぜならば、もしそれが流通の外部にでておらず、流通貨幣量から分離されていない非流通手段としての貨幣である、したがって広い意味においてのみ蓄蔵貨幣であるとするならば、資本として本来の意味において「遊休」し、「失業」している「遊休貨幣資本」、「貨幣形態で充用を待っている失業資本」というようには規定することができないからである。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、狭義の蓄蔵貨幣であると規定することができる。

しかし、おなじく狭義の蓄蔵貨幣である第二章第二節以下においてのべた独立的な致富形態としての蓄蔵貨幣、「貨幣準備金」としての蓄蔵貨幣、さらに世界貨幣の準備金としての蓄蔵貨幣とは、形成の契機、目的、役割をことにしている。独立的な致富形態としての蓄蔵貨幣は、第二章第二節においてのべたように、致富欲、黄金欲から生ずる「熱情」にもとづいて、抽象的富の物質的定在としての、社会的富の表現としての貨幣を蓄蔵するという貨幣蓄蔵によって形成される蓄蔵貨幣であり、ふたたび流通に復帰することを否定されて流通の外部に存在しているが、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の再生産過程における必然的、または偶然的な諸契機にもとづいて形成され、この過程から排除され、分離されており、流通の外部に存在しているけれども、一定の大きさにたったばかり、一定の期間が到来したばかり、または資本の再生産過程が外的な諸事情にもとづいて攪乱されたばかりには、ふたたび流通にはいるべく規定されている蓄蔵貨幣であり、したがって貨幣資本である。つぎに、貨幣としての面において、流通との関係で、流通手段（広義）としての機能を否定した蓄蔵貨幣であるという点においては、「貨幣準備金」としての蓄蔵貨幣と「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣とは共通しているが、前者は、単純な商品流通を基盤としているのにたいし、後者は、資本の再生産過程を基盤としている。したがって、前者は、たんなる貨幣とし

て存在するが、後者は、貨幣資本として存在しており、この点においてまず両者はあいことなっている。「貨幣準備金」としての蓄藏貨幣は、流通貨幣量の増減を調節するために存在する貨幣である。このような機能をはたしうる「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の「資本形態」は、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」および「遊離貨幣資本」である。固定資本の減価償却基金は、固定資本部分の再生産のために積立てられている蓄藏貨幣であるから、これを他の目的のために使用すれば、おなじ規模における生産をもつづけていくことができなくなる。したがって、固定資本の減価償却基金は、その本来の目的以外には使用することはできない。「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、生産の規模を拡大し、拡張するために積立てられている蓄藏貨幣であるから、そのときの資本の再生産過程に復帰すべく規定されていない。しかし、「W—G」なる過程が正常な限度以上に延長されて商品資本の貨幣資本への転形が異常に手間どる「ばあい、あるいはまた、「この転形が完了しても、たとえば、貨幣資本が転形されるべき生産手段の価格が循環開始当時の水準よりも騰貴している」<sup>(36)</sup>ばあいなどに生ずる資本の循環の攪乱を解決するための「準備金」として、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「特殊な副次的役割」<sup>(37)</sup>をもはたすことができる。また、「遊離貨幣資本」は、生産諸要素および生産物Wの価格の変動にもとづいても形成されるわけであるから、それは流通貨幣量の収縮によっても形成されるものであるということができる。したがって、「遊離貨幣資本」は、「貨幣準備金」としての蓄藏貨幣のより高次の資本規定をあたえられた資本制生産および流通のもとにおける「再現」であるということができよう。このように、資本制生産および流通のもとにおける流通貨幣量の増減を調節する機能をはたしうる「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣の「資本形態」は、「新たに蓄積された未投下貨幣資本」および「遊離貨幣資本」である。これらのものが流通貨幣量の増減を調節する機能をはたしうるのは、それらが、そのときの資本の再

生産過程に拘束されておらず、そして狭義の蓄蔵貨幣であるからである。さらに、世界貨幣の準備金としての蓄蔵貨幣と対比してみれば、第一節においてのべたように、単純な商品生産および流通のもとにおいて国際的流通のために形成される世界貨幣の準備金としての蓄蔵貨幣は、より高次の資本規定をうけて資本制生産および流通のもとにおいては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣として「再現」する。国内的流通のための「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、貨幣としては広義においてのみ蓄蔵貨幣であるが、この国際的流通のための「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、国際的流通の独自性にもとづいて狭義の蓄蔵貨幣であった。したがって、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、狭義の蓄蔵貨幣であるといっても、このような国際的流通のための世界貨幣の準備金としての蓄蔵貨幣とはあいことなるということはあきらかである。

また、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、狭義の蓄蔵貨幣であるから、貨幣の面においても、広義においてのみ蓄蔵貨幣である国内的流通のための「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣とことなっている。またいまのべたように、国際的流通のための「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣ともことなる。狭義の蓄蔵貨幣は、流通貨幣量の増減を調節する機能をはたしうるのであるが、この機能をはたす「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣の「資本形態」は、「遊離貨幣資本」であり、流通貨幣量の膨脹にたいしてのみそれに応じうるものが「新たに蓄積された未投下貨幣資本」であるということになる。

(32) *Das Kapital* Bd. III, S. 132. 邦訳『資本論』第三部、一八二ページ。

(33) a. a. O., Bd. I, S. 285. 邦訳『前掲書』第二部、三七三ページ。

(34) 拙稿『蓄蔵貨幣の第二形態』について、一五七—八ページ参照。

(35) 「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする蓄蔵貨幣にかんする主な諸説については、拙稿『蓄蔵貨幣の第二形態』について」の

(四) において考察したので参照されたい。

(36) *Das Kapital*, Bd. II, S. 80~1, 邦訳『資本論』第二部、一一二ページ。

(37) a. a. O., Bd. II, S. 80, 邦訳『前掲書』第二部、一一二ページ。

さらに、資本制生産および流通のもとにおいて形成される蓄藏貨幣ではないが、したがって、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣でも、また「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣でもないが、その流通の第一段階が資本の循環にふくまれているので、剰余価値  $g$  の一部分を資本家がみずからの生活のために個人的な消費にあてる流通  $w|g|w$ 、および労働者が特殊な商品である労働力を資本家に販売し、そしてうけとる貨幣を労働者が生活のために消費する流通  $A|G|W$  において形成される蓄藏貨幣について簡単に考察しておこう。

$A|G|W$  における  $A|G$ 、および  $w|g|w$  における  $w|g$  は、いずれも資本制生産の流通の一部を構成する。すなわち、 $A|G$  は、労働力という特殊な商品をその所有者である労働者が資本家に販売する過程であるから、資本家の労働力の購買  $W|A$  であり、しかもそれは、貨幣形態で投下された価値が資本に、剰余価値を生産する価値に、現実に転形するための本質的な条件をなしている。 $w|g$  は、商品資本の流通  $W|G$  に、つまり資本の循環にふくまれている。ところが、これらの第一段階を補足する第二段階  $G|W$ 、および  $g|w$  は、資本の再生産過程から分離された一般的な商品流通上の事象としてあらわれ、資本の循環にふくまれていない。このように、 $A|G|W$ 、および  $w|g|w$  という流通の第一段階は、いずれも資本の循環にふくまれているが、これらの流通形態は、いずれも単純な商品流通形態であり、いわゆる所得流通である。

さて、これらの流通のもとにおいても、第二章第一節および第三節においてのべたような蓄藏貨幣が形成される。

(一)  $A-G$ 、 $w-g$ の結果である貨幣は、いずれも労働者、資本家の個人的な消費にあてられる。それは生活に必要な諸商品を購入するためにもちいられるのであるが、この購買は一時におこなわれなくて、継起的に時期をことにしておこなわれる。つまり、個人的消費にあてられる所得は、逐次、漸次的に支出される。したがって、これらの所得の一部分は、一時「日常的消費に予定された準備金」という形態で各個人の手もとにとどまる。この「日常的消費に予定された準備金」は、いわゆる「鑄貨準備金」であって、第二章第一節においてのべた購買手段の準備金である。それは流通を中断されている、流通していない、非流通手段としての貨幣であり、広義の蓄蔵貨幣の形態にある。「 $g-w$ は、資本家が本来的商品にであれ御自身または御家族のためのサービスにであれ、とにかく支出した貨幣を媒介とする一列の購買である。これらの購買はばらばらであり、時期をことにしておこなわれる。だから、この貨幣は、一時は、日常的消費に予定された準備金または蓄蔵貨幣——<sup>(38)</sup>けだし、流通を中断された貨幣は蓄蔵貨幣形態にあるわけだから——の形態で実存する」。また、資本家や労働者が生活に必要な諸商品を一定の支払期日にその代金を支払うという契約にもとづいて購入しているばあいには、個人的消費にあてられる所得の一部分は、その債務にたいする支払のためにあてられ、支払期日までのあいだ支払手段の準備金としてとどまる。支払手段の準備金もまた流通していない、非流通手段としての貨幣であり、広義の蓄蔵貨幣の形態にある。以上のように、所得の流通において、貨幣の一部分は、一時的に広義の蓄蔵貨幣の形態をとる。この蓄蔵貨幣は、第二章第一節においてのべたように、広い意味においてのみ蓄蔵貨幣である。<sup>(39)</sup>

(二)  $A-G-w$ 、 $w-g-w$ という流通においては、(一)におけるような購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣のほかに、流通を中断されて、流通の外部にでている狭義の蓄蔵貨幣も形成される。それは、たとえ

ば、結婚、住宅、養育あるいは老後、不測のわざわいなどにそなえるために貯蓄されている貨幣である。これらの蓄藏貨幣は、 $A \rightarrow G$ 、 $w \rightarrow g$ の結果である貨幣の一部分を $G \rightarrow W$ 、 $g \rightarrow w$ としてもちいないで、したがって流通を中断せしめて、それを流通の外部にひきあげることによって形成される。したがって、これらの貨幣は、狭義の蓄藏貨幣の形態にある。「労働者が賃銀から貯金するばあいには、……中略……それは、かれが賃銀の一部分を蓄藏貨幣に転形し、そのかぎりにおいて需要者・購買者としては登場しないということである」<sup>(40)</sup>。この蓄藏貨幣は、富の社会的表現としての貨幣を蓄藏することを目的とした独立的な致富形態としての蓄藏貨幣ではないから、流通とまったく無関係のものではなく、必要に応じてふたたび流通にはいる。社会的には、この蓄藏貨幣は、流通貨幣量の増減を調節する機能をはたす蓄藏貨幣であるといふことができる。

(38) *Das Kapital*, Bd. II, S. 61, 邦訳『資本論』第二部、八七ページ。

(39) 真藤氏は、「つぎに、質料変換のための『必要』を契機とする消費的家計の蓄藏をみよう。さきの資本の運動範式は二つの所得流通、 $A \rightarrow G \rightarrow W$ と $w \rightarrow g \rightarrow w$ を含む。いずれも単純流通であるから、 $A \rightarrow G$ および $w \rightarrow g$ での中断によって資本運動から離れて形成される。それは形態的には流通手段・支払手段の準備金である。だから、形成契機・主体は異なるけれども、さきの蓄藏貨幣の第一形態に入る」(「資本と蓄藏貨幣」、『ペンキング』第一三七号、所収、四六ページ)とのべ、所得流通において形成される購買手段および支払手段の準備金としての蓄藏貨幣を「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の一つの形態であるとする。「蓄藏貨幣の第一形態」についての『資本論』の敘述をどのように理解されているのであろうか？

(40) *Das Kapital*, Bd. II, S. 113, 邦訳『資本論』第二部、一五四ページ。